美術科教育学会通信 No.57

２００５年10月１日発行

通信事務　代表：〒772-8502　鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地
鳴門教育大学芸術系（美術）講座　橋本泰幸研究室／ Tel. & Fax. 088-687-6481 ／ E-mail：hasimoto@naruto-u.ac.jp
企画・編集：山木朝彦／ Tel. & Fax. 088-687-6485 ／ E-mail：yamaki@naruto-u.ac.jp
編集レイアウト：山田芳明／ Tel. & Fax. 088-687-6636 ／ E-mail：yyamada@naruto-u.ac.jp
企画協力：山田一美（東京学芸大学）　WEB 版：谷口幹也（鳴門教育大学）

「改革の時代」の美術教育を考える

美術科教育学会代表理事　橋本泰幸 (鳴門教育大学)

酷暑の夏が過ぎ, しのぎやすい季節を迎えました。会員の皆様にはご健勝のことと存じます。さて，美術科教育学会は過日，定例の理事会を京都で開催しました。そこでは，学会運営に関わる問題を検討しました。(詳細は今号の学会通信２－３頁を参照してください。)

あわせて，来年３月，京都教育大学で開催されることになった，第 28 回京都大会の件で，大会運営委員長の石川　誠氏から準備の進行状況について，また委員の村田利裕氏からプレ学会開催について報告がありました。

京都大会のテーマは「変革の時代と美術教育」，また，11 月 12 日，京都教育大学で開催されるプレ学会のテーマは「変動期における美術教育－実践を基盤に－」です。どちらのテーマも，変わりゆく時代の中での美術教育の意義あるいは価値を求めるものです。

「構造改革」が政治の世界で叫ばれて以来，国立大学も独立行政法人化されるなど，あらゆる制度の改革が迫られています。このような改革の時代にあって，美術教育は何を維持し，何を変えるべきなのでしょうか。

プレ学会，そして京都大会で，時流に流されることの無い美術教育について研究を深めていこうではありませんか。みなさまのご参加をお待ちしております。

学会はみなさまからの学会費で運営されています

前号にあたる美術科教育学会通信 56 号にて，美術科教育学会の運営に関わる予算案の明細をお伝えしましたとおり，当学会の運営資金として計画した予算総額は，積立金を除き約 570 万円となっております。たいへん大きな額面ですが，学会誌の発行及び郵送と大会開催を中心に必要不可欠な支出を想定すると，運営はまったく余裕のない情況です。収入はみなさまからの学会費納入と，学会誌への論文掲載に必要な掲載負担金から成り立っていますが，そのうち安定した収入源となるのが前者です。すなわち，みなさまからの会費納入が，学会運営のための最も重要な財源となっております。

いっぽう，当学会は長年，学会会則に掲げられた原則から外れた，長期滞納者の存在に悩まされ続けてまいりました。今回の理事会において学会費の滞納を認めない方針とその対応として会員資格の抹消が再度，確認され，今後，厳密にこの方針を貫くことになりました。

以上のことから，現在，学会員である皆様におかれましては，学会運営の状況をご理解頂き，学会費の納入について，今後もいっそうのご協力を賜りたく存じます。また，住居移転や姓名の変更など現況が変わった際には，ご面倒をおかけしますが，学会事務局までご一報くださいますよう謹んでお願い申し上げます。

事務局 山木朝彦 (鳴門教育大学)

第 28 回美術科教育学会 京都大会【第 1 次案内】

美術科教育学会 京都大会事務局代表　石川　誠（京都教育大学）

変革の時代と美術教育

第 28 回美術科教育学会は，３月に京都で開催いたします。それに先立つプレ学会シンポジウムは，11 月に本大会と同会場で開催しますので，本号ではあわせてご案内いたします。

いま，私たちは変革の時代を迎えていると実感させられる事象に度々遭遇します。政治・経済の構造，国際関係，社会や家族の構成といった諸々の局面での変容が，教育にも変革を余儀なくしているといえます。近年，再燃した「学力低下」論争は，戦後の高度経済成長を支えた注入教育への批判的概念として高揚した体験的・総合的カリキュラム重視の教育観にも転換を迫ろうとしています。同時に，こうした「学力」強化の考えは，ともすると芸術系分野には，授業時数の縮減といった形でしわ寄せされがちです。美術教育は，知性と感性を統合し人間形成は自明のこととしてきた私たちですが，「心の教育」が芸術系教育の重視につながらない現状を見据える必要もありそうです。ここで，これまでの理論や実践の研究をとらえなおし，美術教育の存在意義を社会に示す手掛かりを得たいと願っています。

これまで本大会は，斯界を代表する学術団体として，開催校の英知と努力により，時代を映す充実した企画の学術研究大会として精力的に展開されてきました。私たちも，可能な限り参会者に意義ある大会にと願うことは変わりませんが，ここで，一度原点に帰るということを試みたいと考えております。学術研究や実践研究の交流の場としての学会大会という意味づけです。具体的には，研究発表を軸にした会員諸氏の研究交流の場の保障を基本に，発表運営の工夫や研究部会を母体としたコロキウムを設定しました。

どうぞ，京都にお出かけください。多くの皆様のご参会を，お待ちしております。

＜第 28 回美術科教育学会京都大会の概要＞

■会　期　平成 18（2006）年 3 月 25（土）～ 27 日（月）

■会　場　京都教育大学 F 棟（JR 奈良線「JR 藤ノ森」下車＝京都駅から各停 11 分＋徒歩 3 分）

■大会テーマ　変革の時代と美術教育

■日　程（予定）　3 月 25 日（土）午後：受付，開会行事，研究発表①　3 月 26 日（日）午前：研究発表②，部会コロキウム／午後：研究発表③，講演（佐々木丞平氏）／夕：懇親会
3 月 27 日（月）午前：研究発表④，学会総会・閉会

■研究発表申し込み（詳細は同封案内書参照）

申し込み方法：別紙申し込み用紙（同封）にて，下記あてに郵送。

申込期間：平成 17（2005）年 11 月 14 日（月）～ 12 月 5 日（月）（消印有効）

郵送先：〒 612-8522 京都市伏見区深草藤森町 1　京都教育大学
美術科教育（村田）研究室内　第 28 回美術科教育学会京都大会事務局

＊参加申し込みについては，次号通信で詳細をお伝えします。

＊連絡・問合せ先　TEL：075-644-8313（村田），075-644-8312(石川)
E-mail:tomurata@kyokyo-u.ac.jp（村田），mishik@kyokyo-u.ac.jp（石川）

第２８回美術科教育学会京都大会プレ学会のご案内

（同時開催：第９回西地地区研究会 in 京都）

１　プレ学会テーマ　　「変動期における美術教育－実践を基盤に－」

２　日　時　　平成 17 年 11 月 12 日（土）13：00 ～ 17：00

３　会　場　　京都教育大学（〒 612-8522 京都市伏見区深草藤森町 1 番地）

交通：京都駅から JR 奈良線普通 3 駅目「JR 藤ノ森」下車，徒歩 3 分。

京阪電鉄「墨染め」下車徒歩 10 分。

４　後　援　　京都府教育委員会，京都市教育委員会（いずれも申請中）

５　趣　旨

本大会テーマ「変革の時代と美術教育」を受け，社会や教育の変動期に美術教育はいかにあるべきか，その導入としてのプレ学会では，日ごろの実践から問題提起をしていただき，本大会につなげていきたいと考えています。

６　内容と時程

時　　間	内　　容	
13:00～13:30	受付	
13:30～15:00	開会の挨拶	橋本　泰幸（代表理事，鳴門教育大学）
	シンポジウム１ 小学校 中学校 ＊コーディネータ	 朝倉　万貴（京都府城陽市立寺田南小学校） 増田　幸子（京都市朱雀第一小学校） 老松　法光（京都市洛風中「不登校生徒学習支援特区，不登校生徒のための中学校」認定校） 福本　謹一（兵庫教育大学）
15:00～16:30	シンポジウム２ 施　設 教員養成 研究者 ＊コーディネータ	 吉永　太一（滋賀県一麦寮） 西村　隆司（仏教大学） 宇田　秀志（奈良教育大学） 鈴木　幹雄（神戸大学）
16:30～17:00	総合討議	
	まとめの挨拶	花篤　實（西地区統括理事，大阪芸術大学）

７　参加費　無料　資料代（５００円）当日，受付にて

８　事務局　京都教育大学美術科教育　村田利裕

９　参加申し込み

申込方法　メールかファックスで，研究会事務局へ

E-mail: tomurata@kyokyo-u.ac.jp　　Fax: 075-645-1756

締め切り：１０月２２日（土曜日）必着

（以前，お伝えした締め切り日を延長致しました）

2005 年度　第一回定例理事会についての報告

例年通り, 本年度も夏期開催の定例理事会を京都私学会館（京都市下京区室町通高辻）にて, 2005 年 8 月 27 日に開催いたしました。理事 18 名が出席し，来年 3 月の総会における審議と承認に先立ち，学会運営に関わる重要な案件について慎重に審議しました。なお，議題は，総務部（増田金吾副代表理事）・研究部（永守基樹副代表理事）・事業部（福本謹一副代表理事）から提出された後，橋本泰幸代表理事が了解したものです。審議の結果，いくつかの議題については解決の道筋を見出し，いくつかの議題については継続審議となりました。また，学会運営に関わる報告が各部から行われました。議題については様々な意見が交わされましたが，以下の結論となりました。なお，今回の報告文は，前述の括弧内記載の各部副代表理事が記録していた議事記録を相互に確認し，事務局で書式を整理して，まとめたものです。

（文責 : 鳴門教育大学　山木朝彦）

1 総務部関連事項

議題　学会費滞納者問題の対応について

資料説明の後，慎重審議の結果原案通り承認され , 原則として 2 年度分を滞納した者は，退会とするという方針を確認した。ただし，再加入の件は，正副代表理事と事務局で検討し，次回の理事会で決定する。

報告事項

a 日本学術会議について

現在，日本学術会議は体制改変中。（本年 10 月 1 日付けで新体制に移行する。）

b 平成 17 年度会費納入状況，新入会員について

資料に基づき，本二件の報告がなされた。

2 研究部関連事項

議題 「美術教育学」賞・選考委員長の選任について

審議の結果，岡崎昭夫理事（筑波大学）が選任された。

報告事項

a 学会誌第 27 号について

同日午前に開催された学会誌編集委員会において 41 本の投稿（含：特別猶予願）が受理された。査読と刊行スケジュールについては昨年同様。

b 学会誌フォーマットのリニューアルについて

新論文書式案の提示。表紙・装幀・目次などのデザイン検討は逐次完成予定。

c 実践研究プロジェクトについて（座長：新井哲夫理事より）

・昨年度からのプロジェクトの経緯と本年度の目標について

・本年度研究計画の提示

・次年度提出予定の最終報告書に向けての構想と理事各位への協力要請について

3 事業部関連事項

議題　2008 年 InSEA 世界大会の支援について

InSEA 世界大会の支援については，前年度の理事会でも承認されているとおりであり，有形無形の支援を行う。ただし，財政的支援については英文学会誌の発行などのこともあり，今後の検討課題とする。美術科教育学会を 2008 年 8 月の同時期に開催することについては，会員資格，学会誌発行の有無など問題が多く困難と考えられる。ただし，この点についても他の学会等の動向を見据えて引き続き検討する。また美術科教育学会員には，InSEA 参加も含めて協力を要請したい。

報告事項

a 京都大会の大会とプレ学会への協力要請

当理事会において，大会主催大学の京都教育大学の石川　誠教授，村田利裕助教授から理事への協力要請が行われた。

b 地区研究会について

今年度も東西両地区で引き続き 2 ～ 3 回程度行う。

c InSEA 関連

例年 3 月 1 ～ 5 日にポルトガル, ヴィシウ市で国際大会が開かれることなどが報告された。

地区会情報

第 10 回西地区会 in 大阪〈with 学会美術教育史部会〉

「サクラアートミュージアム所蔵 山本鼎コレクションの公開と研究発表」

期日 : 平成 18 年 1 月 14 日 (土)

場所 : 大阪サクラクレパス内にて

第 11 回西地区会 in 神戸

「国際化時代と美術教育」(仮題)

期日 :2 月 26 日 (日)13:00 ～

場所 : 兵庫県立美術館 レクチャールームにて

国立情報学研究所（旧学情センター）電子図書館の利用について

上山　浩（三重大学）

本通信前号において，国立情報学研究所（以下；情報研）の電子図書館の利用について，新システムへの移行に伴う学会としての判断と，新たに発生する一部の課金についての報告があった。本稿はこれを補うものである。

本学会は，学会誌「美術教育学」の全号を情報研の電子図書館サービス (Nacsis-ELS) のコンテンツとして提供し，同時に美術教育学の普及に供している。

情報研は，従来の電子図書館サービス (Nacsis-ELS) と情報検索サービス (Nacsis-IR) を統合したポータルとして年度から論文情報ナビゲータ (CiNii) の運用を始めている。

2005 年度は移行期間としても利用可能であるが ,2006 年度には ,Nacsis-ELS は全廃され ,CiNii を経由してのみ利用可能な NII 電子図書館 (NII-ELS) に一本化される。

Nacsis-ELS から NII-ELS への移行による変化として，コンテンツが PDF に変換されること，それにより課金単位が 1 頁から 1 論文に変更されること，またこれまでの閲覧と印刷の区別がなくなり，さらにはダウンロードが可能になること等が上げられる。これらのサービス向上は歓迎されるが，その一方で，課金システムも大きく変更され，それに伴い，各学会にて対応の判断が必要となった。

従来の Nacsis-ELS の利用料は，基本的には無料で，コンテンツを提供する学会側の要求にそった著作権使用料の設定が可能という形をとってきた。本学会は，既刊アーカイブについては無料とするが，学会員のアドバンテージを確保すべく，新刊分の印刷についてのみ学会員以外から 10 円 / 頁の著作権利用料を徴収してきた。

NII-ELS においては，まず，参加する学会が当該の学会誌データを，無料コンテンツとするか有料コンテンツとするかの判断をする必要がある。無料コンテンツとした場合，いかなるアクセスもフリーとなることは言うまでもない。問題となるのは，有料コンテンツとした場合，仮に利用対象が自学会の学会誌であったとしても，学会員であることを証明する登録手数料の課金が避けられないシステムとなったことである。

本学会としては，先の理事会にて慎重に協議した結果，既刊アーカイブについては無料コンテンツとするが，学会員のアドバンテージを確保するという原則を堅持し，新刊分については，定額制利用は認めるものの，非学会員の著作権利用料を 100 円 /1 件とすると判断した。

これにより，学会員であるということの証明を含んだ利用登録料 2100 円 / 年を支払うか，登録をせずに 100 円 +NII 手数料 525 円 /1 件を支払う必要が生じることになる。ただし，これは，あくまで，NII-ELS にて新刊分の学会誌を利用する場合のみについてである。当然だが，学会員には学会誌の新刊が配布される。また，CD-ROM による PDF 配布の充実も予定している。さらには，学生や大学教員の場合は，サイトライセンスにより大学図書館などが一律に利用料を負担するため，実質的に個人に課金されることはない。

このような状況から，理事会では，学会員に新たな負担が生じる危険性は皆無だと理解し，上記の判断に至った。この件についての問い合わせは，担当理事上山（三重大）まで頂きたい。

報告　第９回東地区会＜実践発表＋シンポジウム in 長野＞

日　時：2005 年 6 月 25 日（土）13:00 ～ 17:00
会　場：信濃教育会大講堂
テーマ「長野で考える美術教育」

2005 年 6 月 25 日(土)13:00 ～ 17:00 の時程で, 信濃教育会 2F 大講堂(長野市)を会場とし, < 第 9 回東地区会『長野で考える美術教育』> を催した。信濃教育会, 長野県･市両教育委員会, 長野県美術教育研究会より後援を賜ることもできた。学会からは宮脇理氏（元筑波大 / 元代表理事), 山田一美氏（東京学芸大), 直江俊雄氏（筑波大）の理事 3 名が, また文部科学省調査官の奥村高明氏も忙しい日程の合間を縫ってお越しくださり, 関谷俊行前理事もお見えになられた。県内外（東京・千葉・埼玉など, 一番遠くは盛岡）から, 小中高養教諭・院生・学部生・アーティストなど 70 名を越す方々がご参集くださり, 何とか盛会裡に幕を閉じることができた。善光寺近くの店での愛餐の場でも有意義な語らいが続く。実り多き会となり安堵。
“学校・美術館・大学の 3 者連携” を本会の主題軸とし, < 図工・美術は大丈夫か ?> なる危機感を通奏低音に < 守ろう !> なる主旋律を鳴らそうとした。本会の趣旨に関し, 案内には上記 3 者が「言わば三位一体的に関わり合う中で, 意見交換し, 討議し, 視点を共有し, 希望を確信しうる明日の美術教育の在り方を摑むことができるような場を設けたいと願い, かつ, ここ長野にそういう意義ある場を設けたいと願い…」と記した。プログラムの内容は下記の通り。

第 1 部：基調講演「美術教育の課題と展望」

第 2 部：実践報告 + 研究発表 + パネル展示「信州発：多様な美術教育（学校 + 美術館 + 大学)」
ｱ) 鑑賞教育 - 岡田匡史, ｲ) 表現 + 鑑賞 - 吉池光則（長野市立東部中), ｳ) 総合的な学習の時間 - 中平千尋（千曲市立戸倉上山田中), ｴ) 学校と美術館の連携 - 工藤美幸（佐久市立近代美術館), ｵ) ワークショップ - 赤羽義洋 (辰野美術館), ｶ) 教育普及の新しい波 - 伊藤羊子 & 木内真由美（長野県信濃美術館), ｷ) 教員養成の取り組み - 藤田英樹（信州大学）

第 3 部：シンポジウム「“図工・美術” はなぜ必要か ?」

橋本光明の基調講演に続く第 2 部は, 中学 2 名 + 美術館 4 名 + 大学 2 名による持ち時間 10 分 / 計 7 コの発表を詰め込み, 発表者･聴者に負担を強いるのではなかろうかと心配されたが, 杞憂であった。皆準備をよくし, ベストを尽くした。宮脇氏は < 統括コメント > で第 2 部を「感銘を受けた」と評価し, 長野（また日本）の美術教育が「これなら何とか次の段階を進めるのではないか」と激励してくださった。参加者には 12 名の論を納めた『紀要 / 概要集』(A4 判 67 頁)を配る。スタッフが朝早く集まりレイアウトを終え壁側に並べたパネルが好評を博した。

第 3 部は, 松本猛（信濃美術館館長), 水内秀雄（長野市立山王小教頭), 森猟郎（板画家), 橋本光明 4 氏をシンポジストとし, 岡田がコーディネートした。学校の美術教育で慣例化してしまっているやり方を, ご自身の経験から起こしてゆく明晰で解り易い思弁により簡潔に論じる松本, それを現場の土俵でじっくり受け止め反対の旨も示す水内,「美術も教育もよく解らん」と言いつつもその大切さを熱く説く森, 歴史と実践観と制度的観点を踏まえ図工・美術を縦横に語る橋本と, 4 氏の全力投球で話は錯綜したが充実した。学校と館の協働を巡りフロアーから発言があったりもした。宮脇氏が議論を整理し展望を示して閉幕となる。

院生 7 名と橋本・岡田ゼミ生 +2 年の働きが支えてくれたことを終りに補記しておきたい。

（報告者：信州大学 橋本光明・岡田匡史）

研究紹介

自然素材を生かした保育教材の開発に関する事例的研究について

竹井　史（富山大学）

■「リサイクル工作」の誤解

私たちの身の回りには使用済の不用物 (生活廃材) があふれています。これらは，造形材料として好適なものも多くあり，リサイクル運動と連動しながら数多くの教材が生み出されてきました。しかし，これらの材料を使った工作は，廃材の有効利用 (reuse) とはいえてもリサイクル (recycle) とは言えないのも多く見られました。例えば，ペットボトルと割り箸等で作るペットボトル船の工作には，多くの場合，ビニールテープやガムテープやアクリル系絵の具が使われます。また，紙パック工作もその表面を覆い隠すためにアクリル系絵の具やテープ類がよく使われます。そして残念ながら，これらの作品の末路は，不燃物ゴミとなるケースが多いといえます。リサイクル工作と言う名のもとで作られてきた作品の末路が，不燃物ゴミの量産につながるという現実を私たちは真摯に受け止めなければなりません。

■ものづくりの原点に立ち帰ること

この現状を踏まえると，本質的な意味において環境に配慮された教育内容・保育内容の提案の必要性が課題として見えてきます。例えば，生活廃材を利用した工作は，最終的に作品の処分が必要になった場合を考え，可能な限り分別処理できるような設計や支援・援助を検討しなければならないでしょう。先述のペットボトル船のペットボトルとわりばしの接合に関して言えば，ペットボトルにいくつかの切り込みを入れ，わりばしを編み込むように接合することによって，テープを使用するよりも強固にその目的を達成出来るというアイデア (知恵) に気づきます。テープ類は，それがどうしても必要なとき，はじめてそれを使う。当たり前のことですが，それがテープ本来の役目であったわけです。つまるところ，私たちは，ものづくりの原点にたち帰る必要性をせまられます。

■自然素材の教材化の可能性についての検討

このような論点に立つならば，日常的に排出される廃材をものづくりの素材として，半ば無条件に受け入れてきたことに懐疑的にならざるを得ません。ものづくりのための材料は，私たちの先達によって実践されてきたように自然界に無数に存在します。これらの素材を生かし，多くのモノを生み出してきた歩みが，私たちのものづくりの歴史そのものであったはずです。

ここに至って，現代において教育用途としての自然素材の価値を再検討する段階にきていると考えられるでしょう。ここで重要なことは，それらの自然素材を先に述べた工作材料の代用として捉えるのではなく，その素材に固有の値打ちを見いだす必要があるということです。

これらの自然素材は，とりわけ，幼児教育で数多くの遊びに活用されてきました。それ故，幼児教育の領域を発端としながら，自然素材の教材化の可能性を考えることは重要な課題といえます。ところで，教材として使用される身近な自然素材には，土，砂，石，雑草などの植物，水，不用木材，金属，紙類 (和紙など)，布 (綿，絹，毛糸など) など，数多くのものがあります。このたび科研費補助金の採択を契機として，木，植物，土の３領域の自然素材に着目し，これ

までの研究を整理しながら，その教材化の可能性を検証したいと考えています。現段階では，富山県，兵庫県に所在する５つの保育所・幼稚園の０～５歳の園児約 500 名を対象に，半参与観察に基づく事例研究を行い，自然素材の教材化の方途を探りたいと考えています。

（1）木素材

本領域で注目しているのは，富山県南砺市井波の欄間 (らんま) 制作において排出される不用端材です。井波では，1998 年頃まで不用端材を業者に委託し，消却処分を行っていました。しかし，その端材は，楠，檜，欅，ｱｶﾞﾁｽなどの良木が多く，それぞれの木の個性 (色彩，香り，質感など) や形状においても想像力をかき立てるものが多いことが分かりました。特に，一つ一つ形状が異なる木片で子どもたちが遊ぶには，想像力を働かせ，何かに見立てたり，意味づけをする必要があります。その意味で，この木片は，遊びの本来的な機能的側面を内包した活動を要求する意義深いものといえます。そこで，この端材を「不定形木片」と名付け，この「木片」を用いた遊びの可能性について調査を行っています。研究対象は，０～５歳の乳幼児です。

各保育室に約 2000 ピースの不定形木片のコーナーを配置し，日常的な遊びで子どもが自由に使用出来る環境を設定しました。現段階では，①感覚的な遊び，②想像的な見立て遊び，③組み合わせて作る造形的な遊び，④ゲーム的な遊びの主に４つの遊びの観点が浮かびあがっています。さらに行政機関の協力により，「不定形木片」を全国の保育者に向けて紹介し，ささやかながらも地場産業の一翼を担う可能性を探っています。

（2）植物素材

本領域では，植物素材がもつ色彩面の可能性について着目しました。具体的には，様々な植物から抽出される色汁による色水遊びの広がり，そこから発展する混色遊びや酸アルカリによって変化する色水遊びのバリエーションの調査，その他，遊びから生活文化への発展として，草木染めの教材化に着目しました。

草木染めでは，タマネギ，藍などの一般的な染めによる新たな教材の可能性に加え，柿渋，からむし，なす，ヒメジオン，ハーブなどの草木染めによる新たな教材の可能性 (ポシェット，マフラー，ポンチョなどの生活用品や様々の人形作りなど) を検討し，具体化したいと考えています。さらに，次に述べる土素材との関係から想定される，泥による染め (泥染め) についてもその可能性を探っています。

（3）土素材

近年，筆者がもっとも注目している領域です。自然素材全般に言えることですが，泥土遊び (土粘土遊びを含む) は，人間と自然環境との望ましい関わりを教えてくれるエコロジカルな原体験を提供してくれます。

例えば，型抜き遊びでは，水の量，土の種類に気をつかい，思考錯誤しながら，きれいに型が抜ける土の状態をさぐりあてなければなりません。まず，土に寄り添い，土の性質を知ることによって初めて型が抜けます。この点，粘土成分が少なく，可塑性，粘性の乏しい砂場の環境や，いつも同じ堅さでいつも思いどおり成形できる油粘土とは大きな違いがあります。このプロセスは，子どもたちに必然的に自然との対話を要求します。その意味でこのプロセス自体が環境教育の基礎を培っているといっても過言ではないでしょう。具体的には，国際土壌学会の粒径分類に基づき，泥土の粒子経及び含有水分量の違いによる造形的な遊びについて，教材化の可能性の検証を行います。その結果として，子どもの造形的な遊びを活性化するトータルな視点としての土環境のあり方について明らかにしたいと考えています。

学会事務局より

◆所属変更・住所変更等があった場合は , 至急お知らせ下さい！

会員の皆様で住所変更等があった場合は，速やかに学会事務局にご連絡下さりますようお願い申し上げます。また，所属変更 , 新住所の連絡がまだお済みでない会員の方は至急，学会事務局までご連絡下さい。連絡先 : 会員情報担当 (山田)yyamada@naruto-u.ac.jp

◆新入会員の紹介

平成 17 年度入会 /

奥本素子，大司美智子 (千葉大学)，半　直哉 (山陽学園短期大学)，神野真吾 (山梨県立美術館), 長谷川洋 (聖徳大学附属小学校), 十林真紀子 (和歌山市立西浜中学校愛徳分校), 吉川昌宏 (広島大学大学院)，森 佳三 (千葉大学博士課程)

【平成 17 年 9 月 22 日までに手続き完了】

※ 学会通信 56 号にて，新会員としてご紹介いたしました井上由佳さんの所属に誤りがございました。正しくは「国立歴史民族博物館」です。お詫びして訂正させて頂きます。

◆学会ホームページをリニューアル致しました

6 月 28 日付けで，美術科教育学会ホームページをリニューアル致しました。(http://wwwsoc.nii.ac.jp/aea/syou.htm) 学会研究大会等の行事案内，研究論文投稿要領の公開等，より会員の皆様に必要な情報をお伝えできるようサイト運営を行っております。今後とも，ホームページの充実を目指し更新を行っていきますので，より一層のご活用をお願い申し上げます。

連絡先 : 総務担当 (谷口)t.mikiya@naruto-u.ac.jp